

## 女性詩にみる絶句の多さについて

### 一 問題の所在

かねてから気になっていたことがある。今日つたわる女性による漢詩を見渡してみると、名高い佳篇の多くが、律詩ではなく絶句によって詠まれている点である。たとえば魚玄機の「別れに送る」<sup>①</sup>や薛濤の「竹郎廟に題す」<sup>②</sup>等、すぐに想起されるこれら女性詩は、絶句の詩型が採られている。このことは中国の漢詩だけに限らない。日本や朝鮮の漢詩においても然りである。以前、稿者が朝鮮女性漢詩を調査したさいも、そのほとんどが絶句によって詠じられていたことが、とりわけ印象的であった。これはいったい何故なのか。「女性の詩と言えば絶句」という典型意識でもあったのだろうか。むしろ女性の漢詩に絶句以外が無いわけではない<sup>④</sup>が、それにしても圧倒的に多いのは、絶句である。本稿はこのことを問題とする。

以下に、どれほど多くの女性漢詩が絶句であるか実態を把握し、そのうえでその要因を系統的に考察してゆきたい。

### 二 8割近くを占める絶句

女性による漢詩には絶句形式が多い——この印象を客観的に把握すべく、およそ五万首を網羅する『全唐詩』をもとに、まずは数量的調査を

行なってみた<sup>⑤</sup>。周知のとおり

中国古典詩では、女性自身の手による作品がそもそも少なく、『全唐詩』においても収録作者数二八七三人のうち、女性は一七八人を数えるにとどまる。これは九・七パーセント、一割にも満たない少なさである。作品数の観点から見ると数字はさらに低くなり、『全唐詩』収録数四九四〇三首の内、女性詩は僅か八一一首、すなわち一・六パーセントしか存在しておらず、きわめて乏しい水脈であることが確認できる。

この乏しいながらも存在する女性詩八一一首の内、絶句の詩型を採る作品は六一六首にもほり、実に七六パーセントを占める多さとなっている。詳しくは本論最後の別表を参照されたいが、いま主だった作者における絶句の占有率を見てみると、右表の通りとなっている。

この調査結果からは、則天皇后・魚玄機・李冶の比率がやや少ないながらも、その他の女流詩人たちにおいては、かなり明瞭な形で絶句が多

作者	作品首数	絶句	%
則天皇后	47	10	21
上官昭容	32	22	69
花蕊夫人徐氏	159	159	100
晁采	23	22	96
姚月華	6	5	83
步非煙	4	4	100
張窈窕	6	5	83
劉采春	6	6	100
趙鸞鸞	5	5	100
薛濤	88	83	94
魚玄機	50	15	30
李冶	16	6	38

佐藤 浩一

数を占めていることが確認されよう。

### 三 言い尽くさない詩型

では、何故これほど多くの絶句によって占められているのだろうか。まず指摘したいのは、絶句という詩型のもつ表現機能である。絶句は律詩と異なり、表現したい全てまでは言い切らず、むしろそれらを断ち切り、余韻を漂わせる効果をもつ。おそらくはこの効果が女性たちの心情と合致して、絶句という詩型を選ばせる側面があったと思われる。薛涛にせよ魚玄機にせよ女性詩人の多くは、妓女や愛妾という立場にあった。識字率すらままならぬ時代であって、士大夫との詩の応酬に備えて作詩の鍛錬を重ねていた彼女たちは、文字を操れる稀有の存在であった。その彼女たちが、後朝や別離の辛さを詠むとき、本音を漏らして伝えたくても、敢えて胸に押し留めて言い尽くさない。そのような言い尽くさない、そして言い尽くせない想いを表現するのに、絶句はちょうど彼女たちの詠いやすさを満たしてくれる詩型であったのではないか。魚玄機が、「ねむり睡よりさ覺めて言ふ莫かれ雲の去る處を——眠りから覚めても、私の居場所など探さないでください」と言い残す絶句にしても、「居場所を探しに來て欲しい」という本音が覆い隠されているかもしれない。どちらともつかぬ言い尽くさないところにこそ、絶句ならではの余韻が生じていよう。もしもこの詩を律詩や排律で詠んでしまったら、紙幅が増える分、せっかく押し留めたはずの想いがあふれ出し、本音を漏らしてしまうかもしれない。その結果、くどくどしい表現となつて、ここまでの余韻はおよそ望めなくなつただらう。

### 四 社会制度からの締め出し

女性の詩に絶句が多いということは、換言すれば、律詩や排律が多くないことを意味しよう。経世を詠い、社会の公器でもある中国の古典詩にあつて、とりわけ律詩や排律は、皇帝の命による応制詩や科挙の試帖詩にも用いられる詩型であり、士大夫たちはこの詩型の上達に磨きをかける必要があつた。それとは対照的に、女性たちは科挙の受験資格を有さない。そのぶん相対的に、律詩と排律の制作機会から離れ、絶句へと向かいやすい側面もあつたのではないか。魚玄機が、科挙という社会的制度から締め出された悔しさを、絶句の詩型でもって詠み上げている作例は、いかにも象徴的に感ぜられる。

これら律詩・排律と、絶句との明白な違いは長短にあるわけだが、その長短を生む要素として作用している一つに、対句を挙げることができよう。絶句は対句を必要としない。いっぽう律詩と排律は対句を必須とし、いかに巧みに対句構造を創り上げるかが巧拙の判断基準の一つとなり、腕の見せ所ともなる。科挙の試帖詩で排律が用いられていた理由も、この判断基準にしやすいという点にある。

この対句構造を必須としない絶句は、フレーズ（上の句）に更なるフレーズ（下の句）を重ねる必要が無い。そのようにフレーズを半減し字数も短縮してしまう「対句の不在」が、絶句を短篇へと向かわせる一要素として作用していよう。

こうした絶句における短篇的要素をより深く理解するために、絶句を苦手とした杜甫の例を挙げてヒントにしておきたい。杜甫は現存するだけでも一四五八首もの詩を手掛けたにもかかわらず、絶句はわずか一三八首（9%）しか無く、一割にも満たない。それは一割にも満たない女性詩人が絶句しか残していないのに比べ、いかにも対照的な違いであ

る。杜甫の絶句はさながら律詩のようであり、すなわち必要としないはずの対偶構造に仕立ててしまう。たとえばその名も「絶句」という詩題の絶句では、以下のとおり完璧な対句で詠んでいる。

兩個黃鸝鳴翠柳 兩個の黃鸝翠柳に鳴き

一行白鷺上青天 一行の白鷺青天に上る

窗含西嶺千秋雪 窗は含む西嶺千秋の雪

門泊東吳萬里船 門に泊る東吳萬里の船

さらに杜甫の二三八首の絶句のうち、78パーセントが連章詩となっている点も象徴的である。杜甫は言い尽くさないと気のすまぬ性質であり、結果その詩は言辞で埋め尽くす分、長篇化する。ところが絶句は言い尽くせない表現機能の短編であり、ゆえに杜甫は短編の長篇化を工夫することになった。その工夫の一つが連章詩である。杜甫は短編の絶句を「其の一」「其の二」……のごとく連章仕立てにすることで、絶句すらも長篇化させていた。

杜甫のケースは見方を換えれば、つまり絶句とは、対句を用いず言い切らない短編詩、ということが改めて確認できよう。

## 五 応酬しやすい短かさ

こうした絶句における「短さ」は、士大夫と詩の応酬をする女性詩人たちにとって、相手との呼吸を合わせるのに丁度良いサイズとなっていたと思われる。それはいわば、現代社会のLINEや微信といったSNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）にも似た伝達状況を想起させる。恋人たちのやりとりでは、一方的に長文を送り付けるのは無粋で

あり、短文の応酬がそこでは続く。絶句という短詩型の応酬は、あたかもそれにも似るのではないか。たとえば「薛涛箋」は、さながら当時のショートメール的役割を果たしていたように思われる。薛涛が創案したという「薛涛箋」は、現代の一筆箋にも似た、深紅色の短冊である。わずか数行しか書けない紙幅からは、そもそも数行で充分という意図がうかがえ、多言はすまいという奥ゆかしさが、そこには感ぜられる。現存する薛涛詩の94パーセントを絶句が占めていた事実は、その意図が形となって現れた結果だと言つてよいのではないか。

## 六 絶句による唱和

女性が詩の応酬をするさいに絶句の短さが丁度よかった、という推測を傍証すべく、その実例を一瞥しておきたい。男性詩人側の現存作品に、女性との唱和を示す作例は極端に少ない。あるいはプライベートすぎて家人らに見られるのは気まずく、破棄したのかもしれない。薛涛へ直接贈った詩として、白居易・王建・元稹による三首が現存するけれども、自作の保存に執着した白居易でさえ、彼女に贈った「与薛涛」詩が『白氏長慶集』には見えず、ようやく『白香山詩集補遺』に見えるだけで、おおよそ保存に熱心だったとは思えない状況となっている。

それら現存する詩の内、元稹の「寄贈薛涛」詩のみ律詩だが、白居易の「与薛涛」詩と王建の「寄蜀中薛涛校書」詩については、いずれも絶句の形となっている。一般的に相手の詩に唱和する際は、詩型まで合わせるのが普通であり、律詩を贈ってきた元稹には律詩をもって返歌したはずである。白居易らに返した詩についても散逸しているようだが、おそらく絶句に対して絶句でもって唱和したことだろう。そのことは、もとより薛涛が絶句を基調とする詩人であることに加え、他の文人と応酬

した四七首のうち四四首までが絶句で占めている事実<sup>⑥</sup>からも窺える。当時の女性たちは、そのように男性と絶句で唱和し、それゆえ絶句が多数を占めてゆくことにもつながったのではなからうか。

## 七 絶句ゆえの気楽

なぜ女性の詩には絶句が多いのかという疑問について、作りやすい基礎的詩型であった——という観点からも検討しておきたい。わたしたち外国人が漢詩を作るさい、母語ではない言語による詩作は、ややもすれば和臭のごとき不注意な癖が出ることもある。その意味において絶句は、紙幅が短い分、注意の喚起も目の行き届くレベルで済むので、くたびれず、たしかに作りやすい。かつて稿者が朝鮮漢詩を調べたさい、女性の漢詩がほぼ例外なく絶句で詠まれていたことに驚いたけれども、外国人にとつての作りやすさを考えてみれば、絶句が選ばれやすいことは確かに共感できる。朝鮮でも女性詩人は妓女であることが大抵のようで、次に引く桂生は、黄真伊と双壁を成す名妓であり、朝鮮を代表する漢詩人として名高い。

参差山影倒江波　　参差として山影江波に倒さまなり  
垂柳千絲掩酒家　　垂柳千糸酒家を掩う  
輕浪風生眠鷺起　　輕浪風生し眠鷺起つ  
漁舟人語隔烟霞　　漁舟人語烟霞を隔つ

舟を浮かべて詠んだ詩である。もしもこの絶句を律詩で詠んでいたとすれば、独りで乗船したのか或いは誰かと同乗したのか、いつ、どこから乗ったのか——といったことまで詠み込まれていたであろう。しかし

女性詩にみる絶句の多さについて

絶句ゆえに、それは絶ち切つてそこまで言及しない。末句では、立ち込めたモヤで漁師の舟を覆い隠してしまい、幻想的イメージを喚起して余韻を漂わせている。いかにも絶句ならではの作品といえよう。

## 八 むすびに

女性詩人たちが、このように絶句を詩型として選んだ理由を考えたとき、不慣れた外国人にとつて取り掛かりやすいエチュード的詩型であったから、という側面は否定し難い。けれどもそれは全面的理由ではなく、一面の理由である。類まれなる文才を誇る桂生や黄真伊たちが、そういつまでもエチュードを習作し続けていたはずは無く、やはりそこには、別な理由もあつたことを検討すべきである。ましてや外国人が不慣れなのはともかく、ネイティブの中国人までが自国の言語芸術に不案内だとは、ほとんどありえない。

これまで考察してきた諸点を踏まえてみると、やはり究極的には、絶句の持つ「言い尽くせない」という表現機能こそが、根底で作用していると結論すべきであろう。言いたくても言つてはいけない——その秘めた想いが余韻となつて揺蕩とうことで、却つて更なる言葉を費やす以上の響きを以つて、相手の心に届くのであろう。蜜月には寄り添うように。別離には突き刺すように。

## 女性詩における絶句の割合——全唐詩のばあい

巻数	作者名	作品数	絶句	
5	文德皇后	1	0	0%
	則天皇后	47	10	21%
	徐賢妃	5	2	40%
	上官昭容	32	22	69%
	楊貴妃	1	1	100%
	江妃	1	1	100%
	6	宜芬公主	1	0
女学士宋氏若華		1	1	100%
尚宮宋氏若昭		1	0	0%
尚宮宋氏若憲		1	0	0%
鮑氏君徽		4	0	0%
蕭妃		1	0	0%
9	蜀太后徐氏	8	1	13%
	蜀太妃徐氏	8	3	38%
	武后宮人	1	0	0%
	開元宮人	1	0	0%
	天寶宮人	2	1	50%
	德宗宮人	1	1	100%
	宣宗宮人	1	1	100%
	僖宗宮人	1	1	100%
	李舜弦	3	3	100%
	李玉簫	1	1	100%
	金貞徳	1	0	0%
	花蕊夫人徐氏	159	159	100%
	楊容華	1	0	0%
	魏氏	1	0	0%
	喬氏	1	1	100%
	七歳女子	1	1	100%
	林氏	1	0	0%
	趙氏	3	0	0%
	郭紹蘭	1	1	100%
	王韞秀	3	3	100%
	張夫人	5	1	20%
	王氏	1	1	100%
	裴淑	1	0	0%
	趙氏	4	3	75%
	張氏	2	2	100%
	薛蘊	3	2	67%
	楊徳麟	1	1	100%
	崔氏	1	1	100%
	陳玉蘭	1	1	100%
	薛媛	1	0	0%
	孫氏	3	2	67%
張立本女	1	1	100%	
侯氏	1	0	0%	
慎氏	1	1	100%	
薛瑤	1	1	100%	

	王霞卿	2	2	100%
	竇梁賓	2	2	100%
	任氏	1	0	0%
	黄崇暇	2	1	50%
	蔣氏	1	1	100%
	周仲美	1	0	0%
	張文姬	4	4	100%
	程長文	3	1	33%
800	柳氏	1	1	100%
	程洛賓	2	2	100%
	晁采	23	22	96%
	崔鶯鶯	3	3	100%
	步非煙	4	4	100%
	崔紫雲	1	1	100%
	姚月華	6	5	83%
	孟氏	2	2	100%
	趙氏	1	0	0%
	李節度姬	3	3	100%
	崔素娥	1	1	100%
	鮑家四弦	2	2	100%
	嚴統姬	1	1	100%
	801	郎大家宋氏	5	1
梁瓊		4	1	25%
劉雲		3	1	33%
崔萱		3	2	67%
崔仲容		3	1	33%
崔公遠		1	1	100%
張琰		3	0	0%
裴羽仙		2	2	100%
劉媛		3	3	100%
葛鶯兒		3	3	100%
劉瑤		3	1	33%
廉氏		3	1	33%
田娥		3	0	0%
劉淑柔		1	0	0%
薛瓊		1	1	100%
趙虚舟		1	1	100%
張瑛		2	1	50%
長孫佐軫妻		1	0	0%
劉元載妻		1	1	100%
劉氏婦		2	2	100%
葛氏女		1	1	100%
李主簿姬		1	1	100%
京兆女子		1	1	100%
湘駅女子	1	1	100%	
若耶溪女子	1	1	100%	
誰氏女	1	1	100%	
光 威 哀	1	0	0%	

	越溪楊女	2	1	50%
802	関盼盼	4	4	100%
	劉采春	6	6	100%
	太原妓	1	1	100%
	武昌妓	1	1	100%
	舞柘枝女	1	1	100%
	常浩	2	0	0%
	襄陽妓	1	1	100%
	王福娘	2	2	100%
	謝綈詩	1	1	100%
	楊萊兒	2	1	50%
	楚兒	1	0	0%
	王蘇蘇	1	1	100%
	顔令賓	1	1	100%
	張窈窕	6	5	83%
	平康妓	1	1	100%
	史鳳	7	7	100%
	盛小叢	1	1	100%
	趙鸞鸞	5	5	100%
	蓮花妓	1	1	100%
	徐月英	2	2	100%
803	薛濤	88	83	94%
804	魚玄機	50	15	30%
805	李冶	16	6	38%
	元淳	2	0	0%
	海印	1	0	0%
863	張雲容	4	4	100%
	崔少玄	1	0	0%
	戚逍遥	1	1	100%
	卓英英	4	4	100%
	眉娘	3	3	100%
	洛川仙女	3	3	100%
	南溟夫人	1	1	100%
	雲台峰五女仙	5	5	100%
	呉清妻	5	5	100%
	上元夫人	3	3	100%
	慈恩塔院女仙	2	2	100%
	蜀宮群仙	6	6	100%
	織女	4	4	100%
	嵩山女	3	3	100%
	青童	1	1	100%
	觀梅女仙	1	1	100%
	呉彩鸞	1	1	100%
	王氏女	1	1	100%
	毛女正美	2	2	100%
	桃花夫人	1	1	100%
	王仙仙	2	2	100%

	楊損	1	1	100%
	妙女	1	0	0%
864	湘中蛟女	2	1	100%
	龍女	1	1	100%
	広利王女	2	2	100%
	湘妃廟	13	13	100%
	明月潭龍女	6	6	100%
	黄陵美人	1	1	100%
	呉興神女	1	1	100%
	夷陵女郎	3	2	67%
866	孔氏	3	3	100%
	唐叵妻張氏	2	2	100%
	韋璜	4	3	75%
	王氏婦	7	7	100%
	客戸里女子	1	1	100%
	密陀僧	1	1	100%
	西施	3	3	100%
	甄后	3	3	100%
	沙磧女子	1	1	100%
	陳宮妃嬪	4	4	100%
	湘中女子	1	1	100%
	薛濤	1	1	100%
	孟蜀妃張太華	2	2	100%
	安邑坊女	1	1	100%
	韋檢亡姬	2	2	100%
	蘇檢妻	2	2	100%
	宮嬪	4	4	100%
	金車美人	4	2	50%
	魏朋妻	1	0	0%
	劉氏亡婦	2	2	100%
	故台城妓	2	1	50%
	無名女鬼	1	1	100%
	孫長史女	4	4	100%
867	石甕寺燈魅詩	2	2	100%
	洛下女郎	2	2	100%
	袁長官女	2	2	100%
	真符女	2	2	100%
	夭桃	1	1	100%
	明器婢	1	1	100%
	妙香	1	1	100%
	廬山女	2	2	100%
	青蘊帳女	3	3	100%
	白蘋洲碧衣女子	1	0	0%
	新林駅女	2	2	100%
	白衣女子	2	2	100%
	合計	811	617	76%

## 注

- ① 魚玄機「送別」其一：秦樓幾夜愜心期，不料仙郎有別離。睡覺莫言雲去處，殘燈一酸野蛾飛。（秦樓幾夜心に愜（かな）いて期（ちぎ）る、料らざりき仙郎別離有るとは。睡りより覚めて言う莫かれ雲の去る処を、殘燈一酸野蛾は飛ぶ。）
- ② 薛濤「題竹郎廟」：竹郎廟前多古木，夕陽沈沈山更綠。何處江村有笛聲，聲聲盡是迎郎曲。（竹郎の廟前古木多く、夕陽沈沈として山は更に綠なり。何處の江村か笛声有り、声声尽く是れ郎を迎えたい曲。）
- ③ 吉本一・佐藤浩一「朝鮮女流漢詩選集花束」について（『異文化交流』一八号、東海大学国際教育センター異文化交流研究会、二〇一八年）を参照されたい。一九四四年に金億（筆名、金岸曙）によって編まれた名詩選『花束』は、歴代の朝鮮女流漢詩の中から二〇〇首が収録されており、いずれも絶句の形式のみで詠まれている。
- ④ たとえば、葉嘉瑩ほか『歴代女性詩詞鑑賞辞典』（上海辞書出版社、二〇一六年）では、絶句以外の名編を数多く載せている。
- ⑤ 『全唐詩』所収の女性詩を調査するにあたっては、厳密には女性本人とは言い切れない作品も、今回の調査では対象として数に含めている。たとえば巻八〇〇所収の崔鶯鶯の詩二首（いずれも絶句）は、元稹の作でもあるが、『全唐詩』自体が崔鶯鶯の詩として採録するので、これに従う。
- ⑥ 松浦友久「唐詩にあらわれた女性像と女性観」（『中国詩歌原論』大修館書店、一九八六年）を参照。
- ⑦ 現存する魚玄機の絶句がやや少ない点については、稿を改めて言及したい。いま要点のみ示すと、おそらく魚玄機は士大夫のような意識も有していたために、他の女性詩人とは異なる側面があったのではないかと推測する。注⑨で示す通り、魚玄機は科挙受験できなかったことを悔やむ男勝りな気概を持っていた。それゆえに、他の女性詩人の多くが絶句に傾く中で、必ずしも絶句のみに縛られなかったのではないかと。とりわけ彼女が排律を六首ものこすのは、その一端を示そう。排律こそは、科挙の試帖詩として出題される詩形にほかならない。
- ⑧ 絶句の表現機能については、注⑥所掲の松浦友久「詩型と表現機能」『中国詩歌原論』に詳しい。
- ⑨ 魚玄機「游崇真觀南樓、睹新及第題名」詩に次の通り詠う：雲峰滿目放春晴，歷歷銀鈎指下生。自恨羅衣掩詩句，拳頭空羨榜中名。（雲峰満目春晴に放たる、歴歷たる銀鈎は指下ろして生ず。自ら恨む羅衣詩句を掩うことを、頭を挙げて空しく羨む榜中の名。——崇真觀の南樓に貼り出された、新たな科挙合格者リストを見たときの詩。人だかりの中、合格者名が春の日差しのもとに貼り出された。はつきりと力強い文字で書かれている。自分は女であるゆえに、文才を覆い隠し、世に出ていけないのが恨ましい。むなしく羨望の眼差しで、高々と掲げられた合格者の名前を見上げることしか出来ない。）
- ⑩ 以上の、杜甫における絶句の問題については、拙論「杜甫における長編詩の文体——「散文論」序説」（『中国詩文論叢』第一八集、一九九九年）を参照されたい。
- ⑪ 薛濤と唱和した例については、張蓬舟『薛濤詩箋』「唱和詩存」（人民文学出版社一九八三年、四九頁）が参考になる。
- ⑫ 元稹「寄贈薛濤」：錦江滑膩蛾眉秀，幻出文君與薛濤。言語巧偷鸚鵡舌，文章分得鳳凰毛。紛紛辭客多停筆，箇箇公卿欲夢刀。別後相思隔煙水，菖蒲花發五雲高。（錦江は滑膩にして蛾眉は秀れり、幻出す文君と薛濤とを。言語は巧みに偷む鸚鵡の舌、文章は分かち得たり鳳凰の毛。紛紛たる辞客も筆を多く停めるほど、箇箇の公卿も刀（薛濤が住む蜀の役人）を夢みんと欲す。別後の相思煙水に隔たり、菖蒲の花発（ひら）き五雲高し。）
- ⑬ 白居易「與薛濤（一作、贈薛濤）」：峨眉山勢接雲霓，欲逐劉郎此路迷。若似剡中容易到，春風猶隔武陵溪。（峨眉の山勢雲霓に接し、劉郎を逐わんと欲し此の路に迷う。剡中は容易に到るが若似（ごと）きも、春風猶も隔つ武陵の溪）
- ⑭ 王建「寄蜀中薛濤校書」：萬里橋辺女校書，枇杷花裡閉門居。掃眉才子知多少，管領春風總不如。（万里橋辺女校書、枇杷花裡に門を閉じる居。掃眉の才子知る多少ぞ、春風を管領し（文辞を操つり）総て如かず）
- ⑮ 注⑫所掲載の「寄贈薛濤」に対する薛濤の唱和詩は未詳だが、「寄旧詩与元微之」という七律を薛濤は元稹に寄せている：詩篇調態人皆有，細膩風光我独知。月下詠花憐暗淡，雨朝題柳為欵垂。長教碧玉藏深處，總向紅箋寫自隨。老大不能收拾得，与君開似好男兒。（詩篇の調態人皆有り、細膩風光我独知。月下詠花憐暗淡、雨朝題柳為欵垂。長教碧玉藏深處、總向紅箋寫自隨。老大不能收拾得、与君開似好男兒。）

賦の風光我独り知る。月下に花を詠じ暗淡を憐れみ、雨朝に柳を題し欵垂（しなだれ）れるを為す。長くせしむ碧玉の深処に蔵れるごとく、総て紅箋に自随を写す。老大（薛濤五三歳）收拾得たること能わず、君と開くこと好男兒（親友）の似し）

あるいは「贈遠」という二首構成の絶句が、これに当るかとも推測される。薛濤「贈遠」…擾弱新蒲葉又齊、春深花發塞前溪。知君未轉秦關騎、月照千門掩袖啼。芙蓉新落蜀山秋、錦字開緘到是愁。閨閣不知戎馬事、月高還上望夫樓。（擾弱たる新蒲葉も又た齊（ひと）し、春深く花発く塞前の溪。知る君未だ秦関に転じて騎すを、月は千門を照らし袖を掩いて啼く。芙蓉新たに落つ蜀山の秋、錦字（女から贈る恋文）緘を開けば到るは是れ愁い。閨閣知らず戎馬の事、月高く還た上る望夫の樓）。この作は、一見したところ七言律詩にも思えるが、実は二首の七言絶句が並んでいゝる。元稹の律詩に合わせて薛濤も律詩に仕立てて応酬する必要があったか

らだろうけれども、二首の絶句仕立てにも見えるこの作品は、いかにも女性詩の意境は絶句にあることを暗示するかのようである。興味深い。

①⑥ たとえば薛濤は武元衡の七言絶句「題嘉陵駅」詩に唱和して、次の七言絶句を詠んでいる。「統嘉陵駅詩献武相国」…蜀門西更上青天、強為公歌蜀国弦。卓氏長卿称士女、錦江玉壘献山川。（蜀門西のかた更に上る青天、強いて公の為に歌う蜀国の弦。卓氏と長卿は士女を称し、錦江と玉壘は山川に献ぐ）。

①⑦ 注③所掲の拙論を参照されたい。また、下定雅弘・豊福健二『朝鮮漢詩古今名作選』（勉誠出版、二〇一九年）も朝鮮漢詩の名編を網羅しており、大変参考になる。

（東海大学国際教育センター准教授）